

今週の
一冊

予測ビジネスで儲ける人びと ウィリアムシャーデン 著

ダイヤモンド社 本体価格 二〇〇〇円 森孝恵訳

すべての予測ははずれる
翻弄されることなかれと説く

【評者】北村行伸 一橋大学経済研究所助教授

この本の目次

- 第1章 人間は未来を知りたがる
世界で二番目に古い職業 / 間違えだらけの予測業界 / 未来は完了形で語れない / 呪術としての予測ビジネス / 人類最後の日? / おとぎ話は卒業しよう
- 第2章 晴れのはずが嵐に
天気予報
- 第3章 エコノミストという人種
経済予測
- 第4章 相場の神様
株価予測
- 第5章 人口はどこまで増えるか
人口予測
- 第6章 夢の技術は登場するか
技術予測
- 第7章 未来学者たちのご託宣
社会予測
- 第8章 理屈を超えたマネジメントの世界
経営予測
- 第9章 確実なのは不確実性だけ

アメリカで歴代もつとも影響力があり、かつ優れた金融経済学者は、おそらくイェール大学のアービング・フィッシャー教授であろう。そのフィッシャー教授には、一九二九年一〇月二四日のニューヨーク株式市場の大暴落の直前、一〇月一五日に「株価は恒久的な高原状態に達したよつである。……数カ月以内に現在よりずっと高値になる」と予測して、大失態を演じたという有名なエピソードが残っている。

このエピソードには幾通りかの解釈が可能である。すなわちフィッシャー教授のような学者でさえ、バブルの絶頂にあつたのだから、まして一般投資家には正確な予測など期待すべくもなかつたにちがいない。最高の金融経済学者にして、この程度の予測しかできないからには、経済学は極めて稚拙で非科学的な学問に違いない。投資

家はフィッシャー教授の予測を間違つていると判断したのではなく、その予測が正しいと判断し、それならば今のうちに株を少し売つて利益を出しておこうという行動をとつた結果である。いずれの解釈にも多少の真理が含まれていそうだが、これを株価やその他の経済予測に限らず、天気予報、人口予測、技術予測、社会予測、経営予測などさまざまな予測ビジネスにまで拡大し、その惨憺たる予測はこれらの歴史と解釈を、実に多くのエピソードを用いて明らかにしたのが本書である。

予測ビジネスへの自衛策

著者が紹介しているように、アメリカにはなんらかのかたちで予測をその生業としている業者は数十万人おり、売上規模は数千億ドルに上る一大産業を形成している。著者によれば、「世界で二番目に古い職業」という予測ビジネスが成り立つのは

「未来を知りたいという欲望は人間の本性であり、未来を知ることによって、不確実性に伴つたさまざまなリスクを回避できるだけではなく、場合によっては大きな利益を上げることができると人びとが考えるからである。しかし、この予測業界の流す予測情報によって、致命的なりスクを回避したり、大きな利益を上げる人が続出しているという話はほとんど聞いたことがない。著者はさらに手厳しく、「こうした専門家は高額の報酬を得ていながら、世の中の流れを

える大事件はおろか、大きな転換点すら予想できないのが常であり、その結果として、「ほとんど役に立たない情報を得るために数千億ドルが使われている」と指摘している。

このような予測ビジネスに翻弄されないための自衛策として著者が挙げているのは、予測を見たら冷静に疑つてみることで、予測の信頼性を評価する目安として次の五点について自問してみるといふことである。予測が自然科学に基づいてい



著者のプロフィール
W. A. Sherden
1950年生まれ。
ジョージア工科大学、スタンフォード大学、オースターマーズ・マサチューセッツ工科大学で教授を務める。現在、保険業界でプロカー業務、資産運用、コンサルティングを手がけるマーシュ&マクレンランでコンサルタントを務める。ジャーナル・オブ・ビジネス・ストラテジー誌などの経営誌を中心に多数の論文を寄稿。

るが、予測手法に確かな根拠があるか、予測者の社会的信用は本物か、予測者はしっかりした実績を持っているか、特定の予測に対する自分の信頼が、自分の考え方や希望的観測によつて影響されていないか。

著者は、「経済や株

限定合理性の下での意思決定の問題として経済学者のあいだで研究が進められているところだ。もっとも大切なことは、未来が予測不可能であるからといって、先のことを考えなくてもよいということではなく、予想外の出来事に柔軟に適応し、意欲と努力しだいで、自分にとって望ましい未来を実現させることができるという主体的な意識を持つことである。